

### ライラさんは将棋アイドルになります 3

「あの、名物のからし蓮根サンドがある予定だったんですが……」

マイクを持っているのは、黒髪の少女。少したれ目で、何かにおびえているような表情をしていた。実際彼女は、困っていた。

「まいりましたですねー、今日はまだからし蓮根が届いてないとのことでございます」

隣にいるのは、褐色の肌、金髪の少女。こちらは言葉とは裏腹に元気そうな顔をしていた。

「お店の車が動かなくなっちゃったらしくて。運が悪いですね……」

「でも、馬刺しソフトがあるので、そちらを食べるでございますよー」

「はい、こちらも名物なんです。ソフトクリームの中に馬刺しがふんだんに……わっ、すごいにお……香ります」

「冷たくておいしいですねー」

「あ、ライラさん、どんな味がしますか」

「野性的な味がしますです」

「私も……あ、とってもとっても、おいしいです」

このなんだかへんてこな食レポは、動画サイトのコメント数をいつもより二割ほど増やしたのであった。

「はあ、疲れた」

三東は、肩を落としながら家に帰ってきた。

白菊ほたるを加え、所属タレントが三人になった310プロダクション。そのプロデュースは三東一人で行なわなければならない、あちらこちらに走り回っていた。

「ただいま……二人とも、何してるの？」

玄関の扉を開けると、廊下に月子さんとライラさんがいた。二人ともゆっくりと、足を滑らせるようにして歩いていた。よく見ると、靴下には穴が開いている。

「あ、三東先生お帰りなさい」

「おかえりなさいでございます」

「その靴下……」

「今……音を立てずに歩く練習をしていたんです」

月子さんは、そろりそろりと三東に近づいた。確かに足音が聞こえない。

「なんのために」

「あの……まず、床とか畳が傷まないですし……借金取りの方に気づかれにくいので……」

「はあ」

「古い靴下もスリッパ代わりにこうして二重に履いて……あの、ほかにもライラさんにいろいろ伝授を……」

「月子殿は節約のベテランでございますので」

月子さんの家はずっと貧乏で、彼女はお金を稼ぐためにプロ棋士を目指した。日本に来てから貧乏になったライラさんとは、年季が違うのである。

「じゃあ、机の上のペットボトルも」

「……ろ過装置……です……」

大きなペットボトルの中に、小石や砂が詰め込まれていた。

「水の節約だね」

「節約というか……止められるときもあるので……」

水は一般的に、ガスや電気よりも後に止められる。金本家の困窮具合がうかがえる。

「大変勉強になりました」

ライラさんはにこにこしている。何はともあれ、月子さんに役割ができてうれしい三東であった。

「なんと今日から、新しいプロジェクトが始まりまふ

っ……ます！」

テレビの中で、将棋アイドル道明寺歌鈴が叫んだ（囁んだ）。

「おー、なんでしょうか」

番組進行の、山村七段がとってつけたような声で尋ねる。

「最近是将棋に興味を持ってるアイドルも多いんです。それで、いずれ団体戦にアイドルチームとして出たいと思ひまして」

「ほー」

「アイドルチームを作り、監督を迎えることにしました！」

「監督ですか。それは？」

「この方でひゅっ……です！」

ででーん、という音とともに、一人の青年が現れた。ボタンの多い黒いスーツにマントという、なかなか珍しいいでたちであった。ちなみに私服である。

「辻村充六段です！」

「なるほど、彼ならうってつけかもしれませんね」

テレビの前では、三東が頭を抱えていた。

「なんだって彼が」

「人気……ですね」

独特なファッションセンス、まあまあのイケメン、かなりの実力。辻村は、テレビタレントとして重宝されているほうであった。ちなみに310事務所も狙っていたが、大手芸能事務所に持っていかれたという過去がある。

「目指すは年末の同僚戦です。これは社会人が3人1チームになって戦う団体戦で、アイドルチームは入門クラスでの優勝を目指します」

「が、頑張ります！」

「ということは辻村先生、ほかのアイドルも参加するんですね」

「もちろんです。すでにサポートメンバーも含めて、チームは出来上がっています。誰がいるかは、来週以降のお楽しみということで」

「おもしろくなってきましたねー。それで、何か特訓的なことはするんですか」

「はい。団体戦はチームワークも必要ですし、いろいろなチームと対戦して武者修行をしたいと思ってます」

「いいですね。対戦相手は決まってるんですか」

「それがまだなんですよ。学校や道場、それに芸能人チームなんかとも対戦したいですね」

「なるほど。では番組で募集してみましようか」

「はい、それを頼む予定でした」

三東と月子さんは顔を見合わせた。芸能人と対戦。番組で募集。つまり、310 プロにチャンスが。

「ただなあ」

現在、310 プロには三人の所属タレントがいる。ただ、月子さんはプロ棋士だ。団体戦のメンバーにはなれない。

「どこかで紹介とかしてもらえたらいいけど」

「うーん……いるのでしょうか……」

「難しいだろうなあ。かといって今から探して見つかるか」

「でも……頑張ってみましょうよ」

「そうだね」

「え、えっと……あっ」

「二択だったんだけどねえ、嬢ちゃん指運がないねえ」

「運が……無い。知ってます……これぐらいの不幸はいつものので……」

とある将棋道場。白菊ほたるは、連敗を重ねていた。

新しい事務所に入り、将棋アイドルになることを求められた彼女は、何とか成功したいという気持ちにな

っていた。そのため自ら将棋道場に通っていたのである。ただ運が悪いことにその道場では初心者にやさしく教えてくれる人はおらず、運が悪いことに少女に優しい声をかけてくれる人もいなかった。

「う……」

涙が出そうになるのを、ほたるは必死にこらえていた。そんなとき。

「お願いしますっ！！」

とんでもなく大きな声が、道場内に響き渡った。

「おおっ、振るのかー！」

窓ガラスが、びりびりと揺れるほどだった。

「負けたそうだな！ でも諦めないよ！ あっ、やべー、詰んでるな！ 負けました！」

最後までテンションが高かった。

ほたるは、ずっとその姿を見ていた。そして小さく、つぶやいた。

「今日は不幸……じゃないかも」